

# 学校における「隠れたカリキュラム (The Hidden Curriculum)」を再考する

(教育長職務代理者 日景 弥生)

2019年3月に弘前大学を退職し、同年5月より弘前市教育委員会教育委員を仰せつかりました。よろしくお願い致します。

日本では、性別で異なる教育課程を実施していた時期がありました。例えば、体育の授業が男女で別々に実施されたり、高等学校家庭科のように“女子のみ必修”だったことです。これは、1985年に日本が国連の「女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約（女性差別撤廃条約）」に批准したことで制度的には解消しました。しかし、学校には「隠れたカリキュラム（潜在的カリキュラムとも言います）」が根強く残っているように思われます。

「隠れたカリキュラム」とは、学校の公式なカリキュラムの中にはない、知識、行動の様式や性向、意識やメンタリティが、意図しないままに教師や仲間の生徒たちから教えられていくといったもの（Wikipediaより引用）です。例えば、“男女別名簿”は、子どもを性別で二分し、概ね“男子が先、女子が後”の並び順になっています。女性差別撤廃条約では、女性差別を「性に基づく区別、排除又は制限であって、政治的、経済的、社会的、文化的、市民的その他のいかなる分野においても、女性（婚姻をしているかいないかを問わない）が男女の平等を基礎として人権及び基本的自由を認識し、享有し又は行使することを害し又は無効にする効果又は目的を有するものをいう」と明記され、男女別名簿はこの区別にあたります。男女別名簿の弊害は、“男子が先、女子が後”が当たり前という無意識のバイアスが形成され、さらには男女の優劣・上下関係の自明視につながる可能性を含んでいます。もちろん健康診断などの合理的な理由がある場合は、適時男女別名簿を使用します。全国的にみると男女別名簿は、少なくなりました。しかし、今年度の弘前市の男女混合名簿実施率は、小学校8.8%、中学校0%と非常に低率です。なお、“女子が先、男子が後”も性別で二分することに変わりはありません。

それ以外にも隠れたカリキュラムは存在します。筆者が実施した小学校国語教科書調査では、描かれている成人の職業は、男性が32種48人に対し、女性は11種19人と大きな開きがありました。また、男性の職種は、探検家、宇宙飛行士、政治家など様々でしたが、女性は教師、看護師、弁当屋のような固定的な性別役割を思わせる職種ばかりでした。これでは、女子の将来の職が限定され、拡がりにくいように思います。また、管理職の多くが男性であることも、男女の優劣・上下関係の自明視につながる可能性があります。例えば、小学校では、教員の半数以上が女性ですが、管理職の女性は激減します。教員は、子どもにとってのロールモデルですから、「トップは男性」と刷り込まれると思われれます。先生方の意識改革とそれへのアクションも必要です。

学校は、子ども達の能力を育成・向上させることが使命です。学力の向上だけでなく、今まで“当たり前”だった慣習等をもう一度見直してみることが望まれます。